
謎解きはリボーンの後で・・・

時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

謎解きはリボーンの後で・・・

【Nコード】

N3742Y

【作者名】

時雨

【あらすじ】

オリ主である高嶺 朱雀は目を覚ますと一つの部屋にいた。たかみねすびく

扉から出てきた執事、黒野から今までの事を説明され親の計らいによって並盛高校に行く羽目になる。

何かそこで？グローブやボンゴレリングに炎灯しちゃったり、原作とは一味違う技習得しちゃったり、んで何故か難事件に挑んじゃったり、様々な出来事が起こっちゃいます。楽しんで見てください。

目を覚ますと・・・(前書き)

！ 初の二次創作なのでどうなるか分かりませんがどうぞご覧ください

目を覚ますと・・・

目を覚ますといつもの朝だった。

眩しい朝日が窓を突き抜け部屋に入ってくる。小鳥たちのさえずりが聞こえてくる。

いつも通りの朝だった。だが一つだけ違うところがある。

「・・・どこだここ？」

俺、高嶺 たかみねささく 朱雀とはある部屋のベッドにいた。

しかし、その部屋はただの部屋ではない。貴族様が暮らしてそうなあの無駄に広い部屋だ。

カチャ・・・。

すると、部屋の扉が開いた。

「あつ。お気づきになられましたか」

そこには黒のダークスーツ姿の男がいた。

「後気分はどうですか？」

「あの。一つ聞いても良いですか？」

「はい。何でしょう？」

「あんた誰？」

すると男は、

「おっと、申し遅れました。私わたくしここで執事をやらせていただいております黒野という者です。以後お見知り置きを」

「執事？」

「はい。朱雀様の旦那様から雇われました」

「父さんから！」

俺は目を丸くしながら言った。

「は、はい。作用でございます。覚えてらっしゃいませんか？朱雀様。昨日の事を」

「昨日の事？」

よく思い返してみた。すると一つの答えにたどり着いた。

「あー。まさかかとは思いますが昨日、突然意識を失ったのって・・・」

「はい。旦那様が朱雀様の首に一撃を入れて、気を失わせたためでございます」

「ああ・・・。そう」

その時、俺は内心思った・・・。

『あんのクソ親父がああああああああ！!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
!-!』と、心の中で叫んだ。

そんな事を気にせず黒野は、

再び俺は目を丸くした。

「何でここまで作ったんだか・・・いつそ私服校の方が良かったんじゃないか？」

「それは同感でございます」

「しゃーない。とっとと選んじまうか！」

とは言ったものの、普通に一時間もかかってしまった。やはりここまで多いと時間はかかるわな・・・。
結局、俺が選んだのは上は黒のブレザー、下は白と黒のチェックのズボンだ。

「とてもお似合いですよ」

「そりゃどーも」

「では、次はカバンなのですが」

「まだ選ぶのか？」

「はい。これの他にも、靴、部屋、運動着、e t c...」

「あー分かった分かった。とにかくさっさと選んじまおう」

そして早速、バックを選び始めた。

バックは先ほどとは違い、三つに決められていたのですぐ決まった。俺は手下げ型のカバンを選んだ。

その後も色々ことは進み、すべてが終わったのはもう夕方頃だっ

た。

「やっと終わったー」

「お疲れさまです」

黒野はコーヒーを机の上に置いた。

「そういえば、ここから並盛高校は近いのか？」

「はい。歩いて15分の所でございます」

「チャリで10分といったところか・・・」

「自転車で行くおつもりですか？」

「当たり前だろそんな近いんならわざわざ車で行く必要無いだろう」

「いえ、そうゆう事ではなくて無いのでございます。自転車が」

「え！そうなのか・・・しょうがない。明日は歩きで行ってその後で買いに行くか」

そうしてかれこれ一時間が経ち、時刻は10時半。

「もう10時半か・・・そろそろ寝るか」

こうして俺は慌ただしい1日を終えた・・・。

目を覚ますと・・・(後書き)

いや〜何か見る限りほとんどオリジナルになってしまいました。

なんか・・・ねえ・・・(前書き)

第2話

いや、今回は前回よりも長くなってしまいました。頑張ってください。

あと少しグダグダです。

なんか・・・ねえ・・・

朝、俺はいつも通り目が覚めた。

ふとベッドの横を見ると荷物の入ったスーツケースがあった。おそらく黒野が準備したものだろう。まったく、本当に準備の良い奴だ。必要な物は全部揃っている。

そう思いながら俺は昨日選んだ制服を身にまとい朝食を取り、出掛けようとした。その時、

「お待ちくださいませ朱雀様」

黒野が何かを持ってきた。

「どうした黒野？」

「これをお渡しするのを忘れておりました」

すると持っていた箱を開けた。そこには二つのリングと懐中時計があった。

「これは？」

「こちらは並盛高校から贈られてきたものでございます。なにも個人認識のようなものだとのことですよ」

ふーん。並盛高校って随分と変わってんだな。

「分かった。ありがとう」

俺はリングをチェーンに通し首にかけ、懐中時計はポケットに入れた。

「それじゃあ、行ってきます」

「行ってらっしゃいませ朱雀様」

）．．．）．．．）．．．）

今、俺は一年生の教室にいる。だが．．．これは．．．ねえ．．．。

『後ろからクラス全員の視線を感じるんだが．．．』

分かりやすく言ってしまうえば、I の第1話でゆう一的気分である。

ただ一つ違うとすれば、クラス全員が女子ではないことだ。ちゃんと男子もいる。

だが．．．その男子でさえも俺の事を凝視している。

怖いよ．．．怖いよパト ッシユ．．．。

「えー、皆さんこんにちは。それでは、我が校の説明をいたします。本校は入学式でも説明したように、自警団を育成するために様々な分野に取り組んでおります。」

ああ。そういえばそんな説明してたな。校長から。確か名前は沢田．．．綱吉だったかな。帰ったら黒野に聞いてみるか。こうしてまあ説明は終わったんだが．．．未だに視線を感じる。すると一人の男子が近づいてきた。

「よっ！俺、山本 啓信^{けいしん}て言うんだ。よろしくな！」

その男子は他とは違い、どこか抜けているいわば天然な奴である。

「あ、ああ。よろしく」

俺は山本と握手をしたついでに、

「なあ。何で俺みんなに見られてるんだ？」

「何でって、そりゃあお前が大空の守護者だからだよ」

「大空の守護者？」

「そつ。大空の守護者はこの七部属性の中でも数少ない人間にしかないからなあ。だからお前新入生の言葉言わされたんだよ。ちなみに俺は雨の守護者だ」

ああ。そういえばあつたな・・・あん時は驚いたよだっていきなり新入生の言葉の書かれた紙を渡されんだもん。

「なあ。その七部属性には何があるんだ？」

「ああ。大空の七部属性には嵐、雨、晴、雲、雷、霧、そして大空の七つがある」

「へー」

「そしてそれぞれを色で表すと、嵐はレッド、雨はブルー、晴はイエロー、雲はヴァイオレット、雷はグリーン、霧はインディゴと言うことになる。みんなのリングを見てみる」

俺はクラスのみんなの指に目をやった。そこには、様々な色の付いたリングがはめられていた。そこで気づいたのは、

「みんなほとんどデザインが違うんだな」

「まあな。リングのデザインによってそいつがどこに所属するかがほとんど分かる」

そこで山本は、

「そつだ。朱雀のリングも見せてくれよ」

「え？ああ。いいけど」

俺は首に下げていたリングを山本に手渡した。

「おつ！やっぱり朱雀もアニマルリング持ってるのか」

「アニマルリング？」

「ああ。アニマルリングって言うのはそれに炎を灯せば実体化して一緒に戦ってくれるとても便利なやつだ。ちなみに朱雀のは・・・これは、鳥だな」

「ふーん。で、もう一つは？」

「ああ。これは・・・」
すると山本の見目が変わった。

「これは・・・ボンゴレリングだ・・・」

「ボンゴレ・・・リング?」

「ああ。この学校の中では三つのAランクオーバーのリングを持つファミリーがある。シモンファミリー、ミルフィオーレファミリー、そして、ボンゴレファミリー」

「そのうちのボンゴレファミリーのリングがこれって訳か・・・」

「ああ。でもまあ良かったよ。お前もボンゴレで」

「・・・え?」

俺は頭の中に?のマークが浮かんだ。

「まさかかとは思うが・・・山本、お前・・・」

「ああ。俺もAランクオーバーでボンゴレファミリーだ」

やっぱりか・・・。ん?てゆうことは・・・。

「なあ。俺達の他にも後5人いるってことか?ボンゴレのAランクオーバーが」

「まあそうゆうことになるな」

いったい誰だ?

「まあ一人はめぼしはついてるんだがな」

「え?誰?」

「俺の友人で嵐のAランクオーバーがいるんだ」

「そっか・・・んじゃあ明日会ってみるか」

「ああ。んじゃあ今日はこれで」

「おう。また明日」

そして今日は帰宅した。

～・・・～帰宅後、俺は黒野に校長先生について聞いてみた。

「なあ。黒野」

「何でございましょう?」

「お前、うちの校長先生について何か知ってるか?」

「校長先生と言いますと?名前は何?」

「確か沢田 綱吉だったかな」

すると黒野の手が止まった。

「ん?どうかしたか?」

「朱雀様、それは確かでございますか?」

「あ、ああ。そのはずだけど・・・誰なんだ?」

「あの方はボンゴレX^{デーチモ}。ボンゴレファミリー十代目でございます」

「え……ウソだろ……」

「もう帰っていらしたのか……」

「なあ。何でお前校長先生の事知ってるんだ？」

「私は……」

その後、黒野の言ったことは、

「私はボンゴレ十代目の守護者だからでございます」

「なん……だって……」

「守護者といっても正確には少し違いますが……」

「どうゆうことだ？」

「私の属性は確かに大空の七部属性なのですが、私は他の部隊に所属していました」

「他の部隊？」

「はい。私が所属しているのは……」

その後、俺は黒野の言ったことに耳を疑った。

「私が所属しているのは……チエデフCEDEFでございます」

「CEDEFってボンゴレとは独立した諜報組織でもあり門外顧問でもある組織だよな」

「作用でございます。良くございまして」

「まあ友人から少し聞いたんだ」

「もしや、山本様では？」

「良く知ってんな」

「はい。彼はボンゴレ十代目、雨の守護者山本 武様の息子にあたります」

マジかよ……。

その後、俺は黒野の話聞いた。話によれば、残りの守護者はあの学園にいるらしいのだが、それが誰かとゆうまでは知らないのとだ。

まあその事に関してはいいや。明日からはちゃんと自転車でいけるから今日よりはゆっくりと行けるからぐっすり寝るとしよう。こつして俺は眠りについた。

~~~~~その頃、学校では、

「集まり始めたな……」

「ああ……」

「ボンゴレとシモンのような……」

校長室には二人の男がいた。

「オレ達の意志を継ぐ真の後継者が・・・」

その校長室には柔らかい月明かりが差し込んでいた・・・。

なんか・・・ねえ・・・(後書き)

まさかの黒野がCEDDEFとゆづオチ・・・。

次回も頑張ります！

( )

ルームメイトはお嬢様？（前書き）

第3話

やっとヒロインの登場です。

ルームメイトはお嬢様？

翌日、俺は自転車で学校に行き、山本にある人物を紹介された。そう。昨日言っていた嵐のAランクオーバーの友人である。だが……。

「こいつが俺の友人、佐久間

さくましようた  
翔太だ」

「誰が友人だ、ダアホ！」

その佐久間 翔太とゆう人物は見る限り少し不良っぽい感じの人物なのだが、どうも不良のように見えない。

え？どうゆう意味だつて？んゝ・・・分かりやすく言えば、なんとなくか見た目は怖いけど心は優しいってゆうあれだよ。ほらよくいるじゃん。見た目は不良だけど見かけによらず横断歩道でおばあちゃんを助けてたりしている人。あんな感じ。

「で、こいつが・・・」

「ああ。大空のAランクオーバーの高嶺 朱雀だ」

「ふーん・・・」

すると佐久間は俺の顔をまじまじと見た。  
すると佐久間は、

「やっぱお前、綱吉さんに似てるわ」

「え？綱吉さんに？」

「ああ」





娘でございます」

へー。まあ、服装からしていかにもお嬢様って感じはするけどな。

「だから私の執事になりなさい！」

「ですからそれは……」

「かしこまりました」

「え？」

「私わたくしがあなたの執事となりましょう。お嬢様」

「朱雀様！」

「……あなたに出来るの？」

夏希が疑いの目で見てきた。

「ご安心ください。私、人のお世話は得意中の得意ですから」

「そ、そう。ならあなたに任せるわ。えーっと……」

「高嶺 朱雀ともうします。以後お見知りおきを」

こうして俺と夏希お嬢様の生活が始まった……。

ルームメイトはお嬢様？（後書き）

いや〜。今回は朱雀が執事になるとゆうオチ……。次回も頑張ります！

え〜っと・・・どちら様で・・・？（前書き）

#### 第4話

今回はリボンに出てくる“あの人”が登場します！

えっつと・・・どちら様で・・・？

翌朝、夏希は目が覚めるとそこにはエプロン姿の朱雀がいた。

「おはようございますお嬢様。昨日は良く眠れましたか？」

「ええ。おかげさまで・・・ところで朱雀」

「はい。何でしょう？」

「あなた何してるの？」

「見ての通り朝食を作っているのです」

朱雀は平然と言った。

「今ちょうど出来上がりました」

テーブルに出されたのはトースト、スクランブルエッグ、サラダ、  
コーヒーだった。

「そう、ではいただくわ」

そして、今日も1日が始まった・・・。

~~~~~俺は一足早く準備が出来たのでお嬢様を待つことにした。

「じゅめんね待たせて」

「いえ、ではまいりますよう」

俺は自転車の後ろにお嬢様を乗せ、学校に向かった。その途中、

「ねえ朱雀、今日の朝食とてもおいしかったわ」

「お気に召していただいて良かったです」

「あなたどこでならったの？」

「フッフ・・・それは秘密ですよ」

「えー。教えてよ」

こんな感じで歩いていると目の前に一人の男が現れた。

「おい、お前ら！」

「いいから、教えてよ」

「では、今度簡単なものを教えましょう」

「やった！」

二人はその男を素通りしていった。

「だから、ちょっと待てよ！」

男は少しキレ気味で二人を呼び止めた。

そして、俺は振り返り、

「何ですか？とゆうか・・・どちら様ですか？」

「俺は並盛高校2年剣道部主将、持田だ！」

そこまでは聞いてねーよと言いたい気持ちを抑え再び持田先輩の話
を聞いた。

「高嶺 朱雀だったな。お前に決闘を申し込む！」
「は、はあ」

「放課後、剣道場にこい！逃げるんじゃないぞ！」
と、言って持田先輩は去っていった。

はあー。どうしよう。しゃあない、行くか……。

~~~~~放課後、俺は剣道場に行った。だが何か様子  
がおかしい……。なぜならそこには剣道部員だけでなく一般生  
徒もいるからだ。

「なあ山本。持田先輩ってそんなに強いのか？」

「まあ去年、市大会で優勝したくらいだからな。」

「ふーん……」

話していると、持田先輩が現れた。その姿は剣道の胴着と片手に竹  
刀とゆう格好だった。

「待たせたな」

「どうやら決闘の内容は剣道勝負のようですね」

「ああ。一本を取った方が勝ちとなる。そして勝った方は賞品とし  
て、池沢 夏希を手に入れる事が出来る！」



「だな」

すると、持田先輩の面が真っ二つに割れた。

「な！」

「一本・・・取らせていただきました」

「しよ、勝者、高嶺 朱雀！」

すると周りから一気に歓声が沸き起こった。

「ふう・・・終わったか・・・」

俺は竹刀を軽く振り下ろし、剣道場をあとにした・・・。

~~~~~  
時間は過ぎて今は夕食の時間。夏希は朱雀の作った料理を食べていた。

「そついえば朱雀」

「何でしょう？」

「剣道場の時思ったんだけど、あなた剣道したことあったの？」

「いいえお嬢様。一度もありません」

「ウソ！じゃあ何であんな動きが出来るの？」

「分かりませんが身体が勝手に・・・」

「へー。じゃあ『お嬢様を物扱いするのはただじゃおきませんよ』は?」

俺はあーと言い、

「失礼ながらお嬢様、我々執事の指名はなんだと思いますか?」

「え?それはこんな風に食事を作ったり掃除をしたり」

「それもちろん大事なことでございます。しかし最も大切なのは主であるお嬢様を守ることでございます」

「え?」

「お嬢様はこれから生涯誰かに支えられて生きていくとゆうことをお忘れ無きように」

夏希はその言葉の後、窓から見える月を眺めた。

え〜っと・・・どちら様で・・・？（後書き）

持田先輩・・・、ご愁傷様です・・・。

次回は謎解きします！

殺しのワインはいかがですか？（1）（前書き）

第5話

今回は投稿が空いてしまいました。

そして今回は自己最長のページ数です」「。」「

皆さん、頑張って読んでください・・・」（

殺しのワインはいかがですか？（1）

翌日、俺はクラスで話題になっていた。

そりゃそうだ。市大会の優勝者を一撃でしとめたんだもん。

「ねえねえ、朱雀君って剣道やってたの？」

「私も教えてほしいなあ」

こんな感じですつと質問攻めにあっている。そんなところに、

「相変わらず人気だな」

「山本。俺の顔が嬉しいように見えるか？」

「いや、どっちかつつと、疲れてるように見える」

「あたりめーだ！ここまで質問攻めにあって平気な奴を俺は見て見てーよ！」

「いるぜ、一人」

「佐久間だろ」

俺は分かっていた。佐久間はクラスの中でも人気者だ。

「アイツはすげーよ。勉強もスポーツも何もかもが出来る」

「ついでにピアノ、料理もお手のものだ」

「まあ、唯一苦手なのは、女子だけだな」

そんな感じで話していると、先生が入ってきた。ちなみに一時間目は数学だ。

「ほーら席に着けー。つっても今日は自習なんだけどな」

クラスからは喜びの声があがった。確かに、自習つっても先生から課題を出されたのは一度もないからな。

「それじゃあ、席に戻るわ」

「ああ」

そして、一日が始まった……。

～～～授業が終わり、今は帰り道。お嬢様と一緒に帰っていると、

「きゃあああああああ……!!!!!!」

隣の屋敷から悲鳴が聞こえた。

「なんだ!」

俺はすぐに悲鳴の聞こえた屋敷の二階に向かった。

「どうしました!何があつたんですか?」

「あっ……ああ……」

その女性は目の前を指差した。そこには、

「な！・・・」

一人の男が椅子に座って死んでいた。机の上にはワインのボトルと小さな小瓶、そして床にはワインがこぼれたグラスがあった。

「早く警察と救急車を！」

「は、はい！」

お嬢様がそう叫ぶと女性はすぐに警察を呼んだ。

「朱雀、あなたはすぐに帰りなさい！」

「お嬢様？」

「私がお嬢様つてばれちゃいけない理由があるの！早く！」

「か、かしこまりました」

俺はすぐに屋敷から出た。それから10分後、すぐに警察が到着した。

「・・・」
「しかし驚きました。お嬢様が刑事だったなんて」

「まあね・・・ってあなた何で知ってるの！」

おっと、口を滑らせてしまった。今度から気をつけないと。

「実を言うと今日、お嬢様を見守らせていただきました」

「そんなことしたら見つかるわよ！」

「申し訳ありません。今度から気をつけます」

夏希はため息をついた。

「はあー。やっぱり自殺なのかなー」

「と、言いますと」

「あなたも見たかもしれないけど、あの小さな小瓶は青酸カリだったわ。おそらく自殺するために使ったのかもね。朱雀、あなた何かわかる？」

俺は少し黙り込んで、

「い、いえ私にはさっぱり・・・」

『そうよね。刑事が一般人に質問してもね・・・』

夏希がそう思っていると、

「しかし、お嬢様は今日何人かから証言を聞いているはずですよ。その内容を詳しく話していただければ私わたくしなりの考えが述べられるはずですよ」

すると夏希は少し考えた後、

「分かったわ。話してあげる」

「ありがたき幸せ」

「……まず死亡した男は、若林 辰夫たつお62歳。第一発見者はあの家の家政婦よ。なかなか起きないから部屋に呼びにいったら寝室であの状態だったわけ。」

で、ここで私の上司、風祭警部が、

「見ろ、池沢君。若林 辰夫は寝る前にワインを飲んでいたので、誰でもわかるようなことを言ったんだけど、

「あのお嬢様、この風祭警部とゆう人はアホでらっしゃいますか？」

「まあ、そう考えて良いわ。」

で、その後若林家の人間が集められたんだけど、そこで辰夫の弟、若林 輝男てるおは、

「刑事さん、ひょっとして兄は自殺したのではありませんか？」

「いえ、まだ自殺と決まったわけではありません」

で、さらに長男の若林 圭一けいいちは、

「自殺じゃないというのなら、刑事さんはこれは殺人だというんですか」

「べつに殺人であるとはいっておりません。まだ殺人の可能性も否定できないとだけだして」

そして今度は圭一の妻である春絵が、

「まあ、刑事さん、なんて物騒なことをいうんです。この家にお義父を憎むものなど一人もいません」

次に次男の若林 修二は続けて、

「刑事さん、親父が死んだのは自殺だよ。みんな知っていることだ。そうだよ」

「と、いいますと」

「昨日、家族会議で親父は家政婦である藤代 雅美まゆみとの再婚を考えていたのです」

「それで、皆さんの反応は」

「もちろん、反対ですよ。父は騙されているんです、あの女に。きっと財産目当てに違いありません」

すると輝男は胸ポケットからマッチを取り出し、パイプに火を付けた。

「それで結婚を反対された辰夫さんの様子は」

「そりゃあ、すごい落胆した顔で部屋を出て行きましたよ」

「しかし、僕らは父の為に善かれと思って言ったんですから」

今度は圭一が煙草を一本くわえて、百円ライターで火を点けようとしたんだけど、どうやらガス欠みたいで、壁際にいた修二に、

「おい、お前ジッポー持ってたよな。貸してくれ」

やれやれと修二は言いながら、ポケットからジッポーのオイルライターを取り出し、圭一の煙草に火を点けてやると、ついでに自分の煙草にも火を点けた。

「どうやら若林家は喫煙率が高い家族のようですね」

「ええ。私もたまらず窓を全開にしたわ」

そして次の瞬間、扉から家政婦の藤代 雅美が入ってきて、

「旦那様は自殺などではありません！旦那様は何者かに殺されたのです！」

すると春絵は、

「あなた！でしゃばるのも、いい加減にきなさい！お義父様は自殺なさったのよ。それもあなたのせいだね！」

すると春絵は続けて、

「ええ。判ったわ。あなたはお義父様の遺産狙いでこの家に来て遺産をかすめ取るうとしているのでしょう！」

「いえ！私はそんな・・・」

「黙りなさい！この恩知らずの雌豚め！」

すると、風祭警部は時計を見て、

「おっと、もうこんな時間だ」

時計を見ると、時刻は1時45分、昼ドラはおしまいだと言いたいのだろう。もう少し見たかったが仕方がない。

「で、朱雀。あなたこの時どこにいたの？」

「はい。辰夫氏の部屋の棚においてあった見事な蔵書みじしゆに目を奪われておりました」

「ちょっと！ちゃんと仕事しなさい！」

「なんと、私が愛読してやまない『ハーポツー』の最新版があったのでございます」

「無視すんな！てゆうか人んちのものを勝手に取ってくるな！」

「もちろん返しますとも。読み終えたらですがってあっ！」

朱雀の手から本が取り上げられ、

「今すぐ返す！」

「・・・はい」

その後も捜査が続いた。で、場所は変わり辰夫さんが一昨日行ったスナックに聞きに行ったんだけど、

「ええ。来ましたよ」

「どんな様子でした？」

「うーん・・・なんか陽気な感じだったわ」

「はあ・・・」

「あっ！でもカラオケで十八番を歌おうとしたら急に泣き出して」

「急に・・・ですか・・・」

その後、私達はスナックの手伝いをしたの。

「あのー何を作ってるんですか？」

「ん？ああ。最近、経費削減の為にからしをチューブから練りからしに変えたのよ。でも大変なのよね」

「は、はあ・・・」

その後、向かいに住んでいる少年の話によると、

「君が雄太君だね。話があると聞いてきたんだけど」

「うん。あのね、おじいちゃん先生の部屋から明かりが見えたんだ」

「それは何時くらいのことかな？」

「真夜中だよ。午前2時ごろ」

少年は指を2本立てて答えた。

「あ！」

「このように、何らかのものが触れたときに必ず何らかの痕跡は残るはずなのです。しかし、それがなかった。つまり、考えられる事は1つ。ボトルの中に毒を入れたのでございます」

「どつゆつこと？」

「こちらをご覧ください」

俺は黒野に1本のワインボトルを取り出させた。

「これは？」

「イーヨー ドーの1995円ものでございます」

「ホントだ。値札が貼ってある」

夏希はボトルをジーツと見た。

「ねえ、朱雀。これ、どっから見ても毒を入れるところなんてどこにも無いわよ」

俺は「あー……」と言い、その後黒野と顔を見合わせ、

「あの……失礼ながらお嬢様」

俺は顔をズイツと近づけると、

「お嬢様の目は節穴でございますか？」

・・・ハア？

夏希の持っていたコップに亀裂が入った。

「あの・・・お怒りのようでしたらお詫びを・・・」

「謝つてすむならこんな態度しないわよ！」

夏希は朱雀と黒野に怒鳴りつけた。

「それじゃあ聞くけど、あなたこの事件の真相がわかると言っの？」

「いきなり話が変わりましたね・・・。まあ、この事件はそれほど難しいものではございませんが、しかし・・・」

「何よ」

「今ここで犯人を言ってもお嬢様にはご理解いただけないかと・・・」

「じんの・・・！」

夏希は一瞬、拳を振り上げそうになったが必死にその手を降ろし、

「朱雀、私にも分かるように説明して」

その顔はいかにも屈辱に溢れていた。

「・・・かしこまりました。お嬢様」

すると料理を出しながら、

「しかし、まだ夕食の続きでございます」

目の前に料理を出すと、

「謎解きはディナーの後にいたしましょう」

殺しのワインはいかがですか？ (1) (後書き)

最後まで読んでくれた方お疲れ様でした。

次も頑張ります。(^ - ^) 。

殺しのワインはいかがですか？(2) (前書き)

第6話

今回グダグダです。

殺しのワインはいかがですか？（2）

夕食は終わり俺、黒野、お嬢様は大広間にいた。

「では話の続きをいたします。まず、犯人はどうやってワインボトルのラベルをはがさずに青酸カリを入れたのか。それは簡単でございます」

俺はもう一度ボトルの口を見せた。

「よくご覧ください。ここに小さな穴が二つ空いているのが見えますでしょうか？」

「え！」

夏希はもう一度ボトルの口を見た。確かにラベルの頭に小さな穴が二つ空いているのが見える。

「これは？」

「恐らくワインの熟成を促すための空気穴でございます。ワインボトルを見慣れていないお嬢様が分からないのも無理はありません」

「ふん！どうせ私の目は節穴ですよ！」

どつちら夏希はまだあの言葉を引きずっているらしい。

「で、その穴から注射針なんかで毒を入れたってことね」

「さすがはお嬢様、ご理解がお早い。おそらく、辰夫氏が外出している間に部屋へ侵入し、毒入りワインボトルとメッセージカードらしきものを置いていったのでございます」

「メッセージカード？」

「これに関しては後ほど説明させていただきます」

そして俺は続けて、

「まず、お嬢様は辰夫氏が自殺したとお考えのご様子。しかし私はそうは思いません」

「どうして？だって辰夫さんは涙を流すほど思い悩んでいたのよ」

「それは勘違いでございます。スナックのママはからしを練りからしに変えたと言っていました。そこに涙の原因があったのです」

「え？」

俺は二つの皿を持ってきた。

「こちらに市販のチューブのからしと練りからしをご様子しました。ご賞味ください」

夏希はまず、チューブのからしをスプーンに取り食べ、苦い顔をしながらも練りからしを食べた。すると、

「！こっち辛っ！」

「はい。練りたてのからしは涙がちょちょぎれるほど辛いものなのでございます」

「先に言つてよ」

夏希は涙目で言った。

「つまり、辰夫氏の涙の原因は精神的苦痛ではなく、人間の反射運動によるものだと思われます」

「なるほどね」

「そして次に注目すべき点は雄太少年の証言にあります。少年は辰夫氏の部屋から小さな明かりが見えたと言っていました」

「でもあの証言はあまり役立たないわ」

「いいえ、お嬢様。これは重要な証言でございます。まず、私が辰夫氏の部屋にいたとき入り口の脇の棚に懐中電灯が置いてありました。なのになぜ、火を灯したのでしょうか？」

「えつと……。停電だったから？」

「確かにそれもございます。しかし、若林家の人間はあそこに懐中電灯があつたことを誰もが知っているはずです。つまり、部屋にいたのは懐中電灯が無くて困らなかつた人物に絞られます」

「そつか。それじゃあ、犯人は手元にライターやマッチを持っていたあの喫煙者達に絞られる」

「作用でございます。しかし、マッチの明かりでは作業には不十分でございます。作業中、何本もマッチを擦らなくてはなりません」

「てことはマッチを使っていた輝男は犯人ではないわね」

「はい。さらに圭一の妻、春絵も犯人ではございません」

「どうして?」

「彼女は喫煙者ではないからです。あの時圭一はライターのがスが切れたとき、隣に座っていた春絵ではなく、修二から借りた。すなわち、春絵は火を点ける物がなかったとゆうことになります。そしてさらに普通の100円ライターではボタンをずっと押し続けなければ火は消えてしまいます」

「てことは、圭一も除外されて、犯人は修二ってことね!」

お嬢様は自信ありげに話したが俺は、

「まあ、半分当たっていて、半分間違っているといって良いでしょう」
「う」

「え?どうゆうこと?」

「ここで先ほど話したメッセージカードについて話しましょう。恐らく犯人は辰夫氏に毒入りワインを確実に飲ませるためにメッセージカードを使ったと思われます」

「え?」

「お嬢様、昨日はどのような天気だったかご存じでしたか?」

「えっと・・・確か雷と雨が降っていたわ。でもそれが何か?」

「雄太少年の証言によると、辰夫氏はいつも窓を開けていました。」

そして、藤代 雅美さんの証言によると寝る前に本を読んでいたと言っていました。しかし、あの時機の上には本など一冊もありませんでした」

「確かに無かったわ」

「そして、私は本棚を見て、一つ疑問に思ったことがありました」

「疑問に思ったこと？」

夏希は首をかしげた。

「はい。それは一冊だけ逆さまだったことです。10冊や15冊ならまだしも、一冊だけ逆さまなのは少し違和感がございます」

「確かに。でもどうして？」

「犯人が暗闇のなか作業していつつかり間違えたのでございますよう。恐らくその中に・・・」

「メッセージカードがあるってわけね。でも一つ分からないのは動機よ」

「遺産争いでございましょう。恐らく辰夫氏は藤代 雅美さんとの結婚を押し切るつもりだった。このままでは遺産が減ると考えた犯人は辰夫氏を殺害した」

「お金のために大切な家族を殺す？私には想像もつかないわ」

俺は眉間にシワを寄せた。

「お嬢様にはご理解出来ないかもしれませんが。しかし、人は数千万・・・いえ、わずか数百、数十万でも殺意を抱くものなのでございま

「ちょっと、何なんですかあなたたち！」

若林家の人達も集まってきた。

俺は本棚にある逆さまの本を見つけ出した。

『これだ』

その本ねページをパラパラとめくっていくと、封筒のような物が挟まっていた。そこには藤代 雅美以外の家族のメッセージが書かれたメッセージカードだった。

「ここに書かれたことはどれも本心ではございません」

「どうゆづこと？」

「家族全員が共犯者とゆうことです。家族で相談し、辰夫氏を殺害したのでしょう」

「どうして・・・どうしてですか！」

雅美さんは叫んだ。

「うるさい！お前が俺達の金を・・・」

「いいえ、それは違います。辰夫氏は藤代 雅美さんを新たな家族として加えたかっただけでございます」

「なに？」

「あちらでござります」

俺はワインが並んでいる棚を指差した。

「あのワインは圭一さん、輝男さん、修二さん、春絵さんの生まれ
た年のワインでございます。そして、この鍵の番号は109。亡く
なった奥様の誕生日でございます」

そのとき家族の全員がハツとした。

「やはり辰夫氏は亡くなった奥様のことを忘れずに覚えていたので
ございます。彼はこの中に雅美さんという新たな家族を入れたかっ
た。ただ、それだけだったのです」

その後、警察が来て四人を連れていった。

「分かってたの？家族が共犯者だって」

「はい。家族の証言は辰夫氏は落胆した顔で出て行ったと言ってい
ました。しかし、スナックのママは辰夫氏は陽気だったと言ってい
ました。つまり、家族全員が口裏をあわせていたということ。本当
は結婚に賛成していたのでしょ」

夏希は複雑な顔をしながら、

「そんな矢先に家族によって殺される。辰夫さんどんな気分だった
か」

俺達は黙りながら寮に戻っていった……。

殺しのワインはいかがですか？(2) (後書き)

今回はあまり良い出来ではありませんでした。

次回頑張ります。(^ - ^) 。

体育祭の醍醐味って騎馬戦なのかな？（前書き）

第7話

今回は短めにしました。

体育祭の醍醐味って騎馬戦なのかな？

5月

春が少し終わりに近ずき、桜が葉桜に変わる頃。教室ではあることが話し合われていた。

「そんじゃあ、玉入れの選手が決まって次は騎馬戦の大将なんだが・・・誰がやる？」

そう、話し合われていたのは二週間後に開催される体育祭のことだ。俺は綱引き、棒倒し、リレーにでることになっている。

そして今は、体育祭の目玉である騎馬戦の話し合いをしていて、誰が大将をやるのかを話し合っている。

「で、事前に候補のアンケートをやったんだが、候補になったのは朱雀、お前だ」

「え！俺！なんで！」

「そりゃあ、この前の持田先輩との対決を見れば・・・なあ」

なあじゃねえよ！なあじゃ！

「普通の騎馬戦ならまだしも去年の体育祭の騎馬戦。ビデオで見たけど、ありゃあ戦争だぞ！戦争！」

「え？それが騎馬戦じゃないのか？」

おい実行委員。あんたビデオ見てたのか？あんた見てないからそん

なセリフをサラツと言えるんだよ！

「で、どうするんだ？」

うつ……。みんなの目がこの上ないほど輝いている。「いけ！朱雀！」とか、「お前はヒーローだ！」とか、「もっと熱くなれよ！」とかいう気持ち痛いほど伝わってくる。

『ここは……。やるしかないのか？どうする……。どうするア
ル』

そして迷った末、

「……。分かったよ。やってやる」

その瞬間、クラス全員の歓声が湧いた。

「あー。喜んでいるところ悪いんだが、俺の騎馬は誰がやるんだ？」

その瞬間全員が石ように固まった。

てか、それ頭に入れてなかったの？みんな？

そんな中一人が手を挙げた。

「んじゃ俺がやるよ」

「！山本！」

「こんくらいはやんねーとな。で、後は誰がやる？」

そしてそれから10分後、ようやく騎馬が決まった。

「よし！体育祭まであと二週間。張り切ってこーぜ！」

体育祭の醍醐味って騎馬戦なのかな？（後書き）

戦争みたいな騎馬戦ってどんな感じでしょうねWWW
想像しただけで恐ろしい。

捕らわれた親友(前書き)

第8話

またまた長くなって、最多ページ数を更新しました(・|・;)

捕らわれた親友

体育祭も始まり、今は種目も終わり次の種目の準備をしている。

「まず、一つ目は快勝だな」

「ああ。結構楽に勝てたな」

ちなみに第一種目は玉入れで山本の活躍により快勝した。

「それにしても山本には救わせたよ」

「何言ってるんだよ。お前だってバンバン入れてたじゃないか」

「お前程じゃねーよ。だがしかし、佐久間のクラスとE組はヤバかったな」

「ああ。ありゃあ強敵だ」

E組というのはあまり詳しいことは知らないが、スポーツ推薦で入ってきた奴が偶然固まったクラスである。

しかもそのクラスにもAランクオーバーの守護者がいるらしい。

「なあ山本」

「E組のAランクオーバーの奴のことだろ」

「まったく。こいつは読心術でも取得してんのか？」

「ああ。知ってんのか？」

「いや。名前くらいしか聞いてない」

「名前は？」

「上茂 涼介かみしげりょうすけ属性は分からないけどな」

「そうか・・・」

すると、アナウンスの声が聞こえた。

『それでは次の種目、100メートル走に出場する選手は準備してください』

「おっ！確かこの種目は佐久間が出るんだっけ？」

「まあ結果は分かってるけどな」

そこで入場門に行ってみると、やはり佐久間がいた。

「おーい佐久間ー」

「なんだお前か」

「なんだって何だよ。応援しに来たのに」

「いらねーよ。んなもの」

「そー言うなって。頑張れよ」「ああ。一位になってくる」

そう言いながら佐久間は会場に向かった。

「・・・・・・・・・・」

「どうした？朱雀」

「ん？ああ、ちょっと懐かしいなって。中学のころが」

「中学のころ？」

「ああ。アイツのことこんな感じで見送ったな〜って」

「へー。お前、友人いたんだ」

「悪かったないないように見えて」

「ハハツ。わりーわりー冗談だつて」

「つたく・・・」

俺は空を仰ぎながらあの日を懐かしんでいた・・・。

「・・・・・・・・・・」
「おーい。孝平ー」

「ん？」

そこで振り向いたのは男子生徒。如月きみなづき 孝平こうへいは朱雀を見つけ、

「おー朱雀。お前もこの種目に出んのか？」

「フォークダンス！？これまた面倒なヤツが来たな」

「まあまあ、そう言わずにやればすむ話だ」

佐久間はため息をつきながら会場に行った。

「さて、俺達も行くか」

「そうだな」

俺は重い腰を上げた。すると携帯が鳴った。

「ああ、悪い山本。先に行っててくれ」

「オツケー」

俺は携帯を耳に当てた。

「もしもし」

「高峰 朱雀か？」

その声は明らかに人の声ではなかった。変声機で声を変えているとしか思えない。

「誰だお前」

「フッフ……。私はIT。クロケツサファミリーの者だ」

「いったい何の用だ？」

「お前のリングをいただきたい」

「ボンゴレリングのことが」

「作用」

「・・・断る」

「ならば仕方がない。無理矢理でも奪いに行きましょう」

「何？」

すると一人の男子生徒が叫んだ。

「なっ！なんだあれ！」

振り向いた視線の先には、何かこっちに向かってくる物体が見えた。それは車でもバイクでもないものだった。

「あれは・・・ジェット機!？」

そのジェット機から降りてきたのは三人の女達だった。恐らく真ん中にいるのがE.Tで両端の女どもが部下だろう。

「お前がE.Tか」

「そうだ。そしてコイツらが私の仲間、EQとNWだ」

これは本名ではなくコードネームだな・・・。

これじゃあどこの誰だか・・・。

「もう一度言う。ボンゴレリングをいただきに来た。さあ、リングを渡せ！」

すると、観衆の中から、

「何がなんだか知らねーけど」

「このリングは渡すわけにはいかねーなあ」

「山本！佐久間！」

「ほう。他にもリング所持者がいたか」

「とゆうわけで、派手な登場の後すまないが帰ってくんねーか」

「体育祭の続きがあるからな」

するとITTは、

「そうか……。お前コイツがどうなってもいいようだな」

「どつゆつ意味だ？」

「これを見る」

ITTは校舎にあるものを映し出した。

『！コ……コイツは……』

「孝平！」

「そう、貴様の友人如月 孝平だ。コイツには時限爆弾をセットしてある。あと30分もすればドカンさ」

「そんな・・・」

「コイツを救いたければ、リングを渡せ！」

「くっ・・・卑怯な・・・」

そのとき、俺は迷っていた。

『クソッ！どうする・・・渡さなければ孝平は・・・だが渡したとしても殺す可能性が・・・』

すると、モニターから、

「す・・・ざく・・・」

！！！！

その声の主は孝平だった。

「孝平！」

「チッ、起きちまったか」

「ダメ・・・だ・・・絶対に・・・その・・・リングを・・・渡し
ては・・・ならない」

「だがそれではお前が！」

「朱雀・・・お前が・・・ファミリーを・・・守れ・・・そ
の・・・ボンゴレ・・・リングで・・・」

「孝平……」

「俺の……ことは……気にすんな……そのリングさえ……守れば……それでいい」

「ふん。忌々（いまいま）しい。親友を殺してほしくなければリングを渡せ！」

俺は少し黙った後、

「……山本、佐久間。頼みがある」

「何だ？」

「孝平を探し出して時限爆弾を止めてくれ」

「朱雀……やめろ……」

「悪い孝平……お前の言うこと……聞けねーわ。だってよ、目の前で親友が殺されるの黙って見過ごすわけにはいかねーんだ。もし、そんな事したら……俺は一生後悔する。だから俺は……」

俺はITを指差し、

「コイツをブツ倒して、お前を救い出す……!!」

山本は笑みを浮かべ、

「まっ、お前らしいな」

「まっ、まっ、まっ」

二人は納得したように言った。

「頼んだぞ二人とも」

「ああ」

「りょーかい」

二人は校門へと去っていった。
それを見送った俺は、

「んじゃあ先生みんなを校庭から避難させてください」

「わ・・・分かった」

先生も動き出し、生徒を校舎に避難させ、一部が雷の炎で結界を張った。

「朱雀君。本当に大丈夫なんだな」

「大丈夫ですよ。綱吉さん。もしもの時だけお願いします」

「・・・分かった。だが、もしもの時は加勢するからな」

そういって綱吉さんは戻ろうとした、

「あっそつだ懐中時計、上手く使えよ」

そういって戻っていった。

「何を話したか知らないが、どんなにあがいても私達には勝てない

ぞ」

「そんなの闘ってみなきゃわかんねーぜ」

「朱雀……どうして……ここまで……」

「孝平……一つ言わせてくれ。俺は親友の為ならなんだつできると思ってた。けど、こんな頼みを聞くくらいなら、俺はお前となんか友達になってねーよ。だから……俺は絶対、お前を救ってみせる！そのためにも俺はコイツに勝ちたいんだ」

すると、俺のポケットから光を放った。

「こ……これは！あの時貰った懐中時計！」

「ぐっ……なんだ!?!」

結界の内側で綱吉は笑みを浮かべていた。

「そう、それがお前の武器だ。ここからどうするかはお前の答え次第だ」

するとその光はさらに強くなり、

『くっ……ダメだ。目を開けられな……』

く……く……く……く……目を開けるとそこは青空が広がっていた。

「……は……」

「待っていたぞ」

!!!!

振り返るとそこには歴代のボンゴレボス達がいた。そこにはボンゴレの創設者ボンゴレイ世もいた。

「何これ・・・夢？幻覚？」

『E·l·a·n·o·s·t·r·a·o·r·a·i·n·c·i·s·a·s·u·l·l·i·a·n·e·i·l·l·o·(リングに刻まれし我らの時間)』
「刻まれし・・・時間？」

「お前はこの力を受け継ぐ覚悟はあるか」

「え・・・」

「お前はこの力をどう使いたい」

「どづつて・・・それはもちろん・・・」

俺は心の底から思っていること口にした。

「みんなを守るために使いたい。大切な人や仲間、友達を守るために！」

「その仲間のためにすべてを賭けられるか」

「え・・・」

「すべてを投げ出してまで助け出す覚悟が・・・」

俺は少し黙った後、

「・・・はい」

するとI世は、

「良い顔だ。その覚悟しかと受け取った。この力で栄えるも滅びるも好きにせよ、ボンゴレXウンディチエーヌI世」

！！！！

「お前を待っていた・・・さあ、行け！」

）・・・）・・・）その頃校舎内では、

「お、おい何だよあれ・・・」

「わかんねー。朱雀が光に包まれてるとしか・・・」

それを見ながら夏希は心配そうにしていた。

『朱雀・・・』

）・・・）・・・）その頃IT、EQ、NWはまだ警戒している様子だった。しかし、そろそろしびれを切らした様子である。光に向けて銃口を向けよとした、その時

「？待て」

ITは光の中から微かだが何かが見える。すると、その中から

「昔、親父にこんな事を言われた。『やりたいことをやれ！そうすればいつか自分のやるべきことと合わさり世界の声が聞こえる』って。今がそうなのかもな」

俺は口元に笑みを浮かべた後、

「さあ、派手に行こーか！一緒にこの世界を変えよーぜ！」

一気に光は強風ともに弾け、辺りに強い風が吹き荒れた。

「自分の答えを出したか……。やはり、アイツの武器は俺達と同じ……」

そこには額に炎を灯し手の甲にはボンゴレの紋章を宿したグローブをはめた朱雀がいた。

「グローブ使いだ！」

俺は拳を握り直し、

「さあ、始めようか！」

捕らわれた親友（後書き）

いやー。迷った末、やっぱりしツナとジヨットと同じグローブ使いになっちゃいました。

今度から色々な工夫を凝らして頑張ります〇（＾・＾）〇

天空鷹（ファルコティチェーリ）（前書き）

第9話

更新が少し遅れました。すみませんm（| |）m

久しぶりの戦闘描写です！ご覧ください！

「あつちだ!」
そこは椅子に鎖で縛られた孝平がいた。お腹には時限爆弾が巻かれている。

「お前らは・・・確か・・・朱雀の・・・」

「あまりしゃべるな。今助けてやる」

しかし、ここで佐久間が『あるもの』に気づく。

「こ・・・これは!」

「どうした?」

「パスワードだ・・・」

そうそこには一台のノートパソコンがあり、画面には四桁のパスワードがあった。

「残り時間は!」

「あと20分だ!」

「どこまでいけるか・・・だな」

二人は暗号解読に取りかかった・・・。

「・・・」
「ハア・・・ハア・・・」

IT達との戦闘が始まってすでに10分が経過していた。

あれから朱雀も山本達が時限爆弾のパスワード解析に手を焼いてい

るのはモニターを通して伝わっていた。

『クソツ・・・4桁のパスワードっても全部数字って言うほどコイツらはバカじゃねえし、どうする・・・』

これほど朱雀が手こずっている理由は奴ら戦い方にあつた。

三人ただけあつて連携が良く、うかつに突つ込めば確実にやられる。

「それにしても、アイツらの銃はいつ弾切れになるんだ・・・」

そう、普通の銃ならば一丁の弾数は12〜13発程度、なのにアイツらは12発おろか、30は撃っているように見える。見た目は普通の銃なのに・・・。マガジンを入れ替えた仕草も見当たらない。

『クソツ！どうなつていやがる！』

そう思っていると、E.T達は容赦なく撃ってきた。俺は炎でシールドをつくり防御した。

その時あることに気づいた。

「これは・・・」

そこで俺はある一つの仮説が浮かんだ。

『・・・賭けてみるか』

俺はマイクで綱吉さんと呼んだ。

「綱吉さん。一つ頼んでもいいですか？」

「何だ？」

「それは・・・」

俺は内容をすべて話した。

「分かった。やってみよう」

「お願いします」

銃撃が止むと同時に俺は突っ込んだ。IT達も怯むことなく撃ち続けた。俺は炎のシールドを広げながら接近した。俺は懐に潜り込んだ。

「クツ！なめるなあああ！！！！」

銃口は俺の額に向けられた。しかし、そこが俺の考えた作戦だった。すでに超死ぬ気モードになり後ろにまわっていた綱吉さんが銃をつかみ、

「ファースト 零地点突破初代エディション！」

すると、IT達の持っていた銃が全て氷付けにされた。

「やっぱりな。あの銃弾は全部、死ぬ気の炎で出来てたんだ」

「・・・どこで気づいた？」

「さつきガードしてた時、妙な事に普通の銃弾なら炎シールドによって溶かされて溶けた跡が少しでも残るはずだった。しかし、それ
がなかった。つまり、死ぬ気の炎をぶっ放していたということになる」

「フンッ・・・なるほどな・・・」

「何故こんな事をした？お前の仲間がもしこんな目に遭ったら黙ってられないだろう？」

「仲間？・・・フフフッ・・・フハハハハハハハハハハ！！！！！！」

「何がおかしい？」

「仲間？笑わせてくれる！コイツ等なかなか私の手駒にすぎないんだよ！」

「なん・・・だと・・・」

「こんな奴らなんか死んだって困らねーんだよ！」

「お前・・・」

「それよりいいのかなあ？もう時間がないぞ！！！！」

モニターにはパスワード解析に苦戦している佐久間と山本が映っていた。

「朱雀・・・ダメだ！全く解けねー！」

「あと一分だ！」
すると孝平が、

「二人とも・・・逃げる・・・。もう・・・間に合わない・・・。」

「まだまだ！まだあと一分残ってる！」

「そうだ！絶対に救ってやる！お前と朱雀の友情のために！」

「佐久間・・・山本・・・。」

しかし、時間は無情にも過ぎていく・・・。
そして・・・遂に・・・、

「3・・・2・・・1・・・。」

カチツ・・・。

く・・・く・・・く・・・その時、俺の中で時間が止まったように思えた。

頭の中が真っ白になった。

「あれ？・・・爆発・・・しない」

モニターの佐久間の声で俺は我に返った。

校舎内からはどよめきが聞こえた。

「おい・・・どういことだよあれ」

「まさか・・・。」

綱吉さんはモニターを見ながら、

「朱雀……」

「どうしてお前の仲間は今までお前についてきたと思う？それはお前が大切だからだろ。お前に忠誠を誓って、お前を信じてついてきたんだろ？」

「アイツ……」

「そんな奴らの忠誠心踏みにじって、死んでも困らねーとか言ってお前何なんだよ！ファミリィだろ！お前の“家族”だろ！」

「朱雀……」

「お前だけは……お前だけは死んでも許さねえ！！！」

すると、グローブが急に輝きだした。

「クッ！……何だ！」

「来たか……」

「え？……」

輝きが止むとそこには形状が変わったグローブがはめられていた。

「これは……」

「そう、それこそがお前の真の武器。『XIIグローブ』だ！」

「これが……俺の真の武器……」

俺はグローブに炎を灯した。すると今までに無い力が溢れ出てきた。
『すごい……。心の底から力が溢れ出てくる。それに、今までよ
りしつくりする!』

「さあ、決めてこい!ボンゴレX世!」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!!!!!!!」

俺は速攻で突っ込み、奴の懐にもう一度潜り込んだ。
ITも抵抗しようとしたが、時すでに遅し。俺は拳を握り締め思い
切り腹に一撃を入れた。
奴の身体はくの字に曲がりそのまま吹っ飛んでいった。飛んでいっ
た先では既に戦闘不能になったITの姿があった。

「勝った……」

「勝った……」

「かつ……た……」

「……」
「……」
「わああああああああああああああああああ!!!」
「!!!!!!!」
「!!!!!!!」
校舎内から割れんばかりの歓声が巻き起こった。
俺は空を仰いで、

「終わっ……た……」

バタツ……。

「おい朱雀君！」

「朱雀！」

俺はその場に倒れ込んだ・・・。

その後の事は俺は覚えていない。

しかし、孝平も山本達も無事で、俺は死んだように病院のベッドで寝ていたそうだった・・・。

天空鷹（ファルコティチェーリ）（後書き）

戦闘中に武器のバージョンアップ……。なんかすごい事しちゃいました……。

終わりとそれから(前書き)

第10話

更新が少し空きました。すみませんm(|) | () m
どろどろとご覧ください。

終わりとそれから

目を覚ますと俺は病院のベッドにいた。

そこには佐久間、山本、黒野、綱吉さんがいた。

「お！目覚めたか」

「・・・ここは？」

「病院だよ。あの後、お前は倒れて運ばれたんだ」

「そう・・・ですか・・・」

すると俺は思い出したかのように、

「そうだ！クロケツサファミリーの奴らは！イッテッ！」

「おいおい、無茶すんな。安心しろ。ボンゴレの人達が連行していったよ」

「みんなは！」

「問題ないわよ」

入り口には夏希お嬢様がいた。

「お嬢・・・夏希さん・・・」

「お嬢様で良いわよ。みんな知ってるし」

「そうですね・・・」
「で、みんなのことだけど、職員の人達と上茂君のおかげでみんな無事よ。孝平君もあばら骨数本折る程度で命に別状は無いつて」

「そうですね・・・。良かった・・・」

そこに一人の男子生徒が入って来た。

「・・・お前が上茂 涼介か・・・」

「ああ」

「おそらく属性は・・・雷だろう」

「よく分かったね」

「まああの中にいたのは雷属性の人だけだったからな。ただし、普通のランクの炎ではまず破られる。つまり、ランク上位のB〜Aオーバーに絞られる。ただし、あの中に生徒はお前だけだった」

「素晴らしい推理力だ。驚いたよ。さすがは少ない証言の中、若林 辰夫を殺人した犯人を割り出しただけはあるね」

「何故それを？」

「風の噂かな」

そこに綱吉さんが割って入って、

「ハア・・・。まあいい。それより涼介、お前はその・・・ボンゴ

レ・・・なのか？」

「はい」

「ふう、ならよかった」

「何故ですか？」

「あれほどの防御壁を造れる程の純度の高い炎はランボ以来見てないからな。他の奴らにやるなんて勿体無い」

『確かに、あれほどの防御壁を造れるならうちの守りの要かなめになる』

「まあ何にせよよろしくな涼介」

「ああ、「こちらこそ！」

こうして新たな仲間、雷の守護者、上茂 涼介が加わった。

「・・・・・・」 医者が来て後二日すれば退院出来ると話を聞いた時はみんな安心しきった顔でいた。

その後みんなは孝平の方を見てくると言っつて綱吉さん以外は部屋を後にした。

「あの中でよく気がついたな。銃弾が全部死ぬ気の炎だったのに」

「そう言っつて綱吉さんはとっくに気づいていましたよね」

「あっ・・・バレてた？」

「はい」

「そういえば、朱雀君は孝平君の爆弾が偽物だって気づいてたみたいだね」

「分かってたんですか？」

「まあね。やっぱり超直感で感じたのか？」

「いえ、アイツの目を見て判断しました」

「目？」

「はい。アイツ話している時に視線が右上を向いたんです。あれは、人が嘘をつくときに起こる仕草のうちの一つなんです（本当）」

「しかしそれだけでは・・・」

「ええ。確かにそれだけでは判断は難しいです。しかし、最後の決め手となったのは、アイツの戦い方でした」

「戦い方？」

「俺と綱吉さんで連携をとった時、実は近くに他の仲間がいたんです。普通、仲間を手駒扱いする奴ならその仲間を盾にしたはずです。それが無かったということは、仲間を大切に思っていた証拠。人を殺すなんてあり得ません」

「なるほどね・・・」

綱吉さんは少し笑みを浮かべ、

「やっぱり君を選んで良かった」

「え?」

「敵を殺めず、友人、仲間のためならすべてをいとわない。そしてあの時、この力をみんなを守る為に使いたって言う答えも本物だ」

「やっぱりあの空間に綱吉さんもいたんですね」

「ああ。I世も言ってたよ『アイツは俺やX世に似ている』って『しかし、歴代のボスの中でも類を見ないタイプだ』って」

「違うタイプ?」

「俺も聞いて驚いたよ。朱雀君、キミには……」
綱吉さんは俺の顔を見て、

「キミには大空以外の波動も流れている」

「え!?!」

この時、俺は「大空以外の波動」を持っているなんてもちろん知らなかったし、ましてやこの事実により俺の新たな武器が誕生するなんて知るよしも無かった……。

終わりとそれから（後書き）

朱雀の新たな可能性が広がりました！

話は変わり、寒いですね。自分はストーブも良いですが、やっぱりオコタに限ります！

クリスマスもしくは年明けくらいに番外編でも出そうかなと思います。要望がありましたら感想に添えてお願いします。

m ((m

晴のち曇り（前書き）

第1話

更新が空いてしまいましたm（| |）m
かつ、内容もグダグダです。内容はタイトルでまあ勘のよろしい方は分かると思います。
どうぞご覧ください。

晴のち曇り

クロケツサファミリーとの戦闘から一週間がたち、並盛に再び平穏な日々が帰ってきた。

俺も退院以降、夏希お嬢様の執事として仕事を再開している。いつものようにお嬢様と登校していると。

「ねえ、朱雀。あなた身体は大丈夫なの？」

「ええ。山本の雨ゴテのおかげでだいぶ痛みも和らぎました」

そう俺は退院以降、山本の持っている雨の鎮静の効果を利用し、痛みを軽減している。

「晴の守護者がいればいいんだけどね」

「そうですね」

そんな感じで話していると、

「よっ！朱雀と夏希！」

「山本。おはよ」

「おはよ。山本君」

「良い知らせだ！晴の守護者が見つかった！」

「本当か！」

「え？」

「おー夏希！どうした？」

「どうしたじゃないよ！お兄ちゃん晴の守護者だったの？」

「ああ、言っ
てなかったっけ？」

「言っ
てない！」

「えーつと・・・お嬢様。まず落ち着いて・・・」

「これが落ち着いていられるかつっの！」

するとお嬢様のお兄さんは俺を見て、

「おー！お前が高峰 朱雀か！噂はかねがね聞いているぞ！」

「え、ああ。どうも」

「無視するなー！」

「俺は池沢 了平（おぼろけ）。よろしくー！」

「はい。こちらこそ」

俺は握手を交わすと、

「先輩はボクシング部主将で、全国大会で優勝した実績があるんだ」

マジかよ・・・すげえ・・・。

「いいや、俺はまだまだ弱い！誰かを守れなければ本当の強さとは言わない！」

「ちなみに先輩は人生で一度も喧嘩はしたことがないんだ」

へえ・・・。意外だな・・・。

「当たり前だ！この拳は人を傷つける為にあるんじゃない！仲間や自分に迫る困難や逆境を打ち砕く為にある！」

『仲間や自分に迫る困難や・・・逆境・・・それを打ち砕く為にある・・・』

「まさに晴の守護者につってつけたな」

「綱吉さん！」

「ここじゃ場所が悪い。屋上に行こう」

「あ、はい」

く・・・く・・・く・・・く・・・屋上・・・

「では、話の続きといこう・・・っと言いたいところだが・・・」

???

「おい、早く出てこいよ！」

屋上入り口から出てきたのは、一人の男子生徒だった。その格好は黒ズボンにワイシャツ、ベストを着た感じである。

「群れるのは嫌いなんだけど……」

「ハア……。相変わらず雲雀さんそっくりだな」

『あれ？あの人は確か風紀委員の……』

「えっと紹介しよう。コイツがお前たちの雲の守護者。雲雀ひばり雄也ゆうちだ」

「雲の……守護者……」

「俺はコイツが最も適任だと思う」「何故？」

「さっきの池沢も同じように、晴の守護者の使命に合っている」

「使命？」

「晴の守護者の使命。それは……ファミリーを襲う逆境を自らの肉体で碎き、明るく照らす日輪」

「ファミリーを襲う逆境を……」

「自らの肉体で碎き……」

「明るく照らす日輪……」

「確かに適任ですね・・・」

そう、感傷に浸っていると、

「ねえ、帰っていい？」

「だから待ってなつて。ハア・・・。んで、雲の守護者の使命は・・・」

「何ものにもとらわれことなく独自の立場からファミリーを守護する孤高の浮き雲」

「なんだ朱雀君、知ってたのか？」

「ええ。まあ」

俺は続けて、

「嵐の使命、それは常に攻撃の核となり休むことのない怒涛の嵐。雨は、戦いを清算し、すべてを洗い流す鎮魂歌レクイエムの雨。雷は、ファミリーへの攻撃を一手に引き受け激しい一撃を秘めた雷撃」

「随分と詳しいな」

「昔、親父に教えてもらったんだ」

「親父さんって高嶺 玄武たかみねけんむか？」

「知ってるんですか？」

「ああ。今でもアイツと色々やりとりしてるよ。とは言ってもアイツは世界中を飛び回っていて何処にいるのか検討もつかないけどな」

「そう……ですか」

「安心しろ。アイツはそう簡単に死なないよ！」

「は、はぁ……」

「そんなことよりもまずは守護者だな」

「残すは霧か……」

俺は空を見ながら、

『霧の使命それは……無いものを在るものとし在るものを無いものとする。ことで敵を惑わしファミリアの実体をつかませないまやかしの幻影……。となるとやはり術士か……。それも相当な実力を持つ』

「どつちにしろ探すのは難儀だな……」

俺は小声で空にそう呟いた……。

『だが……必ず見つけてやる！』

屋上には心地よい風が吹き抜けていった……。

晴のち曇り（後書き）

終盤は守護者の使命について書いていました。

年明けに向けての番外編も頑張つて書きたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3742y/>

謎解きはリボーンの後で・・・

2011年12月22日23時57分発行